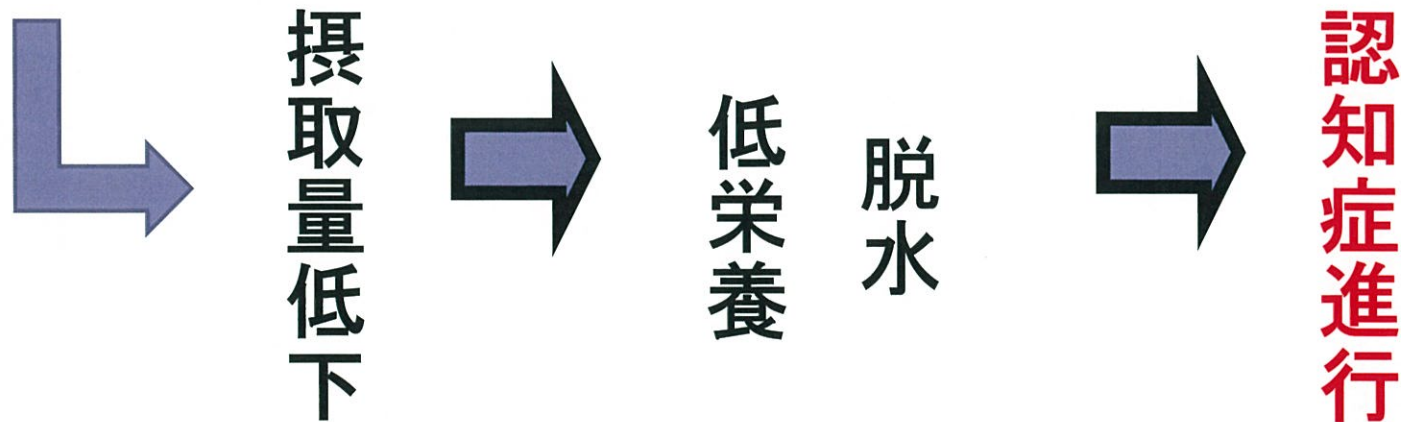


認知症による摂食障害

【中核症状】

- ・記憶障害：食べる方法や手順を忘れる
- ・失行：箸、スプーンの使い方がわからない
- ・失認：食物を食べるものとして認識できない

【周辺症状】 知覚障害→意欲低下→食事拒否



当施設認知症専門棟入所者の現状

- ▶ 平成23年度認知症専門棟入所者実人数51名
- ▶ その内摂食障害のある入所者実人数24名
- ▶ 約5割に認知症による摂食障害がある

一般的に有効と言える対応策が確立されていない

当施設では摂食障害の症状にあわせて食事内容や介助・環境の調整をして自分で食べてもらうために試行錯誤している

(介助や環境の調整方法は演題番号25-P-D①-7で発表)



摂食障害の分類

調査期間に摂食障害のあった入所者24名の症状を分類

分類1: 食事が中断する 10名

分類2: 食事を拒否される 6名

分類3: 食事に手をつけようとされない 4名

分類4: 食べ方がわからない 4名



当施設で認知症高齢者のケアにたずさわる職員を対象に自由記述式アンケートを実施し、それぞれ経験した摂食障害の分類ごとにその時に選択した食事の工夫の成功事例をまとめた

分類1 食事が中断する場合

- 食事途中に徘徊してしまう
- 食べる順番が分からなくなる
- 周辺の動くものに気が逸れて食事が中断する



【食事に注意を惹きつける工夫】

- 行事食を増やし、盛付けを美しくすること
- コース料理のように1品ずつ声をかけて提供



器を
変化させる

節句の行事食を
彩り良くする

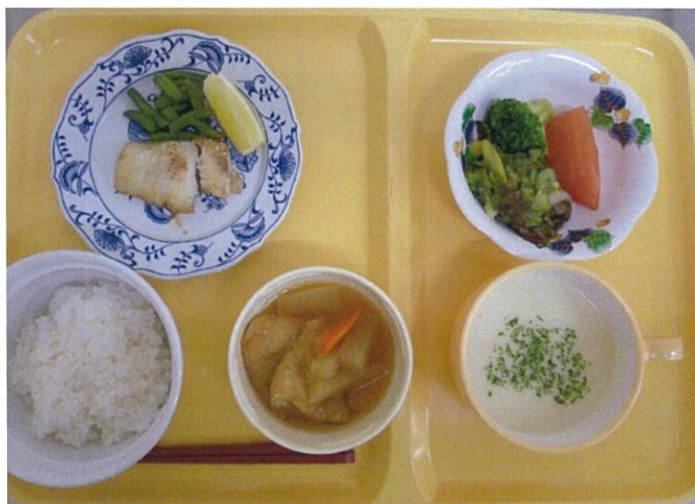
食べ慣れた
郷土料理を提供

食事に注意を惹きつける



利用者の反応

■コース料理のように1品ずつ声をかけて、手に器を置く介助をすると摂食動作がスムーズに起こった
しかし、この方法はご飯とおかずを交互に食べることができない欠点もあるので食事内容によってはどんぶりのように盛付ける工夫もした。



彩り良く盛付けて手に器を置く



分類2 食事を拒否される場合

- 毒が入っていると思い込み食事拒否をされる
- 周囲の人に「食べてはいけない」と言われたと食事を拒否される



【納得して安心して食べてもらう工夫】

- 自分で料理づくりをしたものを食べていただいた
 - 包装をしてある菓子パン等を提供した
 - 食事を弁当折に詰め、のしを掛けて氏名を書いて自分の食事だとわかるようにして提供した
 - 日により状態が大きく変化するので特にケアスタッフとの連絡を密にして状態に合う食事を提供した
-





材料選びから調理、盛付までご自身で行って
もらう

のし紙には氏名を書いて、必ずご自身に開封してもらう




利用者の反応

■自分で作られた料理の摂食量は食事拒否のある方だけでなく参加されたご利用者全般で増加した

■弁当や菓子パンは自分で開封してもらおうと安心して食べられた

■しかし日によって「どうして自分だけが違う食事なのか」と摂取を拒否されることがあるので、その場合はテーブルの同席者と同じ食事内容や形態にすると納得して召し上がられた



分類3 食事に手をつけられない場合

■ 知覚障害のために食事を認識できない

(視覚、聴覚、味覚、嗅覚)

*食器が見えない、味がしない

■ 不安、抑うつ気分による意欲低下

■ 介助しても開口されない場合がある



【知覚を刺激して食欲を引き出す食事の工夫】

■ デイルームに屋台を設置し、その場で調理をした4種類のメニューから選んでもらう

■ いつでも好物を注文して食べることができる「スペシャルランチ」を実施



デイルームで屋台調理
視覚、聴覚、嗅覚を刺激




好きなものを選んで食
べるスペシャルランチ

いつでも注文OK!



利用者の反応

- 屋台調理の食事ではどんなメニューがあるか屋台まで歩いて見にいらしたり、同じテーブルの方と話し合っ
て食べるメニューを決めたりとコミュニケーションや活動性が増した
 - 普段は刻み食を食べている利用者でも常食を召し上がられるという効果もあった
 - スペシャルランチは自分だけがごちそうを食べている特別感や好物を食べる嬉しさが好評
 - 「ご家族様が注文していかれましたよ」と声をかけることで安心して食べてもらうことができた
-
- 

分類4 食べ方が分からない場合

- 食具の使い方が分からず手づかみで食べてしまう
- 料理を他の皿に移し替えるばかりで食べられない
- 介助をすれば食べられる



- 弁当箱や一皿に盛付ける
 - 箸を使わなくてもよいおにぎり食にする
-
- 

複数の器を一つにする




器を持ち替える
手順がわから
なくても食
べることがで
きる




おにぎりだ
と手でも食
べることが
できる



利用者の反応

- 一皿盛りにするとおかずを食べる順番を迷わずに済む
 - おかずの食べ方は分からなくてもおにぎりを手に持ってもらうと食べ始められた(富山の郷土料理である昆布おにぎりになると一層喜ばれた)
 - 手づかみで口に詰め込んで食べられる場合は一口の大きさにカットすることで一口に入れる量も適正になり、窒息の予防になった。
-
- 

まとめ

- 認知症による摂食障害があっても、食事の工夫で食べてもらうことができた方法をまとめた
 - 職員が全て介助をしなくても食事の工夫で食べてもらうことができることがわかった
 - 摂食障害にはさまざまな症状があるが、日により状態が違うので、日頃の認知症の状態を知る職員と話し合っって食事の工夫を試行錯誤しながら支援することが重要であった
-
- 

おわりに

■ 私たちがこだわっているのは安易な食事介助をせず自分で食べてもらうということ。それは食べること自体がリハビリであり認知症の予防になると考えるからです。

■ 栄養士として食事の工夫をすることで認知症による摂食障害があっても自分らしく食べることを支援したい。

■ 今後は多職種が協力して経験を積み重ねて得た効果のある方法を認知症ケアにたずさわる方々と共有したい。

